

Interview

全国から寄せられた園の悩みへのアドバイス

コロナ禍の今だからこそ 子どもの育ちのために 考えておきたいこと

コロナ禍の保育現場では、試行錯誤の実践が続いています。本誌の読者アンケートでは、特に課題に感じるものとして、「行事のあり方」「ICTの導入」「保護者とのコミュニケーション」「保育者の確保・定着・育成」などが挙がりました。さまざまな困難や制約がある中、そうした課題をどのようにクリアすればよいのでしょうか。白梅学園大学名誉学長などを務める汐見稔幸先生に、コロナ禍の今だからこそ、子どもの育ちを支えるために考えたいことをうかがいました。

*本記事は2021年1月下旬に取材しました。



汐見稔幸 (しおみ・としゆき) 先生

白梅学園大学名誉学長、東京大学名誉教授。専門は教育学、教育人間学、育児学。日本保育学会会長、全国保育士養成協議会会長、社会保障審議会児童部会保育専門委員会委員長などを務める。著書に『汐見稔幸 こども・保育・人間』（学研プラス）、『さあ、子どもたちの「未来」を話しませんか』（小学館）など。

行事の あり方

「立派な姿」ではなく、子どもの日常の「リアルな育ち」を伝えることで、保護者の理解へとつなげる。行事の開催もその延長線上に位置づけ、子どもの主体性を引き出せるようにする。

行事に追われる状況を見直し 目的や効果を踏まえて精選を

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、従来の保育の見直しが迫られ、保育現場に混乱や戸惑いが生じる状況が続いています。現場のみなさんが特に課題と感じているテーマを中心に、今、私たちにできること、そして、この先の保育のために考えておきたいことをお話しします。現状で、

いかに子どもたちの育ちを支えていくことができるかを一緒に考えていきましょう。

密閉・密集・密接の「3密」を避けるため、行事を廃止・縮小する動きが広がっています。いまだ感染収束の時期が見えない中、今後の行事の方針を決めあぐねている園は少なくありません。

この問題を考える上で前提として知っておいていただきたいのは、日本の園は世界的に見ても非常に行事が多いという事実です。運動会も、短時

間のスポーツイベントのような形で行われることはありますが、保護者を招いて大々的に行う国は多くありません。

現在、園で実施している行事はすべて必要なものでしょうか。「行事を通してこんな力を育てたい」といった園の方針もあれば、「長年続けてきたのでやめづらい」といった、やや消極的な理由で継続しているものもあるかもしれません。一般に組織では新しいことを始めるより、やめるほうが難しく、1つ増やしたら1つ減らさない限り、内部で働く人の仕事量は増え続けることになります。

多くの日本の園では、行事を柱の1つとして年間計画を組み立てます。運動会に発表会と、多くの行事がある園では、子どもは練習に、保育者は準備に、忙しい日々を送ることになるでしょう。

ところが、コロナ禍により、期せずして行事ができない状況になりました。すると、「行事がなくても、子どもの育ちに大きな変化がなかった」「運動会を短縮したら、むしろ保護者の反応がよかった」といった話がたくさん出てきました。そして、「この行事は、そもそも何のために実施していたのか」「これまで通りのやり方を続けてよいのか」といった議論につながっています。

日本中の園で一斉に行事のあり方を見直すのは、恐らく戦後初めてのことでしょう。この機会に各園で行事の目的や効果をしっかりと議論し、精選していくことは、これからの保育を考える上で非常によいことだと思います。

「リアルな育ち」を伝え 子どもの主体性を育む保育へ

園で行事に関する議論を進める際に大切にしたいのは、子どもの育ちを中心に置くことです。行事の内容を保育者が一方的に決定し、それに従って子どもが練習を重ねるというやり方では、子どもも主体とはいえません。最終的に形を整え、子どもの「立派な姿」を見せても、そこには子どもたちの「やってみたい」といった思いが乗りづらいからです。

一方で、普段の子どもはさまざまな遊びや活動



に主体的にかかわり、楽しみながら成長しているのではないのでしょうか。まずは保護者に、そうした子どもの日常の姿を見せる機会を増やしていくとよいと思います。その際に気をつけたいのは、子どもがどのように育っているかという「リアルな育ち」を伝えることです。例えば、ドキュメンテーションなどを通して伝えてもよいでしょう。

そして、行事も、必要なものを精選しながら、「自分たちが普段していることの中で保護者に知ってもらいたいことを見せる場」として位置づけるのです。そうした活動であれば日常の保育とのつながりができ、子どもたちは「こんなことを見てもらいたい」「みんなで工夫して飾りつけをしよう」などと豊かな発想力で意欲的になるものです。その過程でさまざまな力が育ちますし、保育者の準備の負担感も軽減されるでしょう。

今後、子どもたちに育みたい力を考えると、子どもの主体性を尊重する保育はとても大切です。コロナ禍による行事の再考は、くしくも時代の流れと重なっていたともいえるでしょう。

「保護者が行事を楽しみにしている」と、行事のあり方を変えることに消極的な声もあるかもしれませんが、たしかに保護者にとって、行事は子どもの姿を見られる数少ない場でした。しかし、そもそも日常の保育が見えづらかったのです。大々的な行事でなくても、日常の子どもの「リアルな育ち」を伝える機会をしっかりと設けることで、きっと保護者の理解を得られるはずです。

ICTの 導入

まず、心理的なハードルをクリアすることが大切。ICTを取り入れてみると、便利で快適に研修や日常の業務を行うことができ、効率化にもつながる。

導入して便利さを知れば 自然と取り組みは進んでいく

以前より、園内改革や業務効率化に向けてICTを導入する園は増えてきましたが、コロナ禍でその動きは加速しています。しかし、この分野は園による差が大きく、どこから手をつけてよいかわからずに、取り組みが進まないケースも多いようです。

最初の一步を踏み出せない大きな要因は、心理的なハードルです。長年続けてきた手書き文化への愛着にコンピュータへの苦手意識もあいまって、なかなか導入に踏み切れない状況が見られます。

2020年春に1回目の緊急事態宣言が発出されたとき、私も講師として参加を予定していた研修の多くが中止になりました。関係者にはオンラインによる研修を呼びかけましたが、それまでICTを導入していなかった園からは「やり方がわからない」「機器がそろっていない」といった消極的な答えが返ってきました。ところが、やり方を案内して実施してみると、異口同音に「思ったより簡単だった」という感想が聞かれたのです。このように心理的なハードルさえクリアできれば、ICTはより便利で快適に進化していますから、意外と容易に活用できることも多いものです。

オンライン研修でも、遠隔地の人も気軽に参加できるなど、だれもがオンラインの利点を感じました。そうになると、積極的に利用しない手はありません。例えば、園内研修に活用すれば、一度帰宅して夕食後に家から参加することもできます。多忙ゆえに研修の時間を確保しづらかった園では、ICTをうまく取り入れることで、研修が実施しやすくなるでしょう。

日常業務の効率化が 保育の質の向上をもたらす

日常業務も同様で、心理的なハードルさえ乗り越えれば、意外と簡単にICTを取り入れられます。保育者の多忙さの要因の1つは書類作成ですが、それを手書きからパソコンなどに切り替えると一気に効率化します。例えば、保育記録をフォーマット化し、各部屋にパソコンを置いて、子どもの印象的な姿が見られたときにこまめにコメントを入力したり、写真を取り込んだりすると、夕方にはほとんどできあがります。こうした記録は、子どもの育ちを保護者に伝えるドキュメンテーションとしても活用できるでしょう。

さらに、頻繁な会議も多忙化の要因です。単に保育者間の確認がとれればよい場合などは、オンラインで伝達して、チェックをつけてもらう仕組みにすると、職員会議の時間短縮や回数減につながります。そうした省力化により生み出された時間を、保育者同士が子どもの姿を語り合ったり、保育について議論したりする時間に充てることで、保育の質はますます高まっていくでしょう。



保護者との コミュニ ケーション

孤立しやすい状況のため、保護者に寄り添い、できるだけ話を聴くようにする。オンラインツールなどを用いた、新しいコミュニケーションの形が構築できるとよい。

園と保護者をつなぐ 新たな手法の検討を

コロナ禍により保護者会や個別面談が実施できなくなったり、送迎時にゆっくり話せなかったりして、保護者とのコミュニケーションが難しくなっています。現場のみなさんが保護者との関係構築に苦慮される気持ちはよくわかりますが、一方で保護者の側にも気持ちの変化があるようです。

保育者は医療従事者などと同じく、社会を支えるエッセンシャルワーカーです。この大変な状況下で必死に頑張る保育者の姿に対して、多くの保護者が感謝の念を抱いているという話を耳にします。確かにコミュニケーションの手段は制限されていますが、そうした中でも保護者との間に心の深い部分での信頼関係が築かれつつあるのだと、私は感じています。

その一方で、新しいコミュニケーションのあり方を考えていくことも大切です。オンラインツールを活用した保護者会や個人面談を実施する園もありますが、保護者と必要な情報を交換して、良好な関係性を保つ上でよい方法といえるでしょう。

保護者が孤立しやすい状況で 子育て支援の必要性が高まる

コロナ禍では、子育て支援もより重要になっています。外出自粛で家にこもり、保護者同士が気軽に集まるのも難しい状況で、気持ちが減入り、大きなストレスを感じている保護者が少なくないと考えられるためです。そうした保護者の不調は、子どもの育ちにも影響を及ぼしかねません。

保護者に対して私たちができる支援は、個々の様子を注意深く見取り、心に寄り添い、話を聴く

ことだと思えます。保護者の表情が曇っていると気づいたら、「お話を聴きますよ」などと声をかけるとよいでしょう。「悩みを話せる存在が近くにいる」と感じるだけでも、保護者の気持ちは楽になるはずです。ただし、状況を改善する力になりたいという思いから、気持ちに余裕がない保護者に対して「こうしたほうがよい」といったアドバイスをすると、逆に追い詰める場合もありますから、慎重さも必要になるでしょう。

対面で話をする時間が取りづらい場合は、オンライン会議室を設定して希望する保護者に入ってもらい、1対1で悩みを聴くという方法も考えられます。また、保護者同士が集まって相談し合える場をオンラインで用意してもよいかもしれません。大切なのは、保護者が孤立しないように、園と保護者や、保護者同士をつなぐサポートをすることです。



保育者の 確保・定着・ 育成

社会人で保育者を志望する人は増加傾向。年齢や経験に関係なく
対等に語り合える関係づくりをして、居心地のよい職場をめざし、
入職した保育者の定着へとつなげる。

保育者を志望する社会人には キャリア形成のサポートを

コロナ禍以前から、保育者の確保は多くの園で課題でした。一方で、保育が子どもの育ちに与える重要性が社会に認知されたり、先行きの不透明な社会で資格をもつことの心強さがあったりなど、さまざまな理由により保育者をめざす人は、特に一度社会に出た人の中で増加する傾向にあります。新卒の学生だけではなく、ぜひ、既卒の社会人にも目を向けてください。資格をもちながら保育の仕事をしていない人もいますし、社会に出てから「やっぱり保育者になりたい」と、意欲をもって新たなキャリアに踏み出そうとする人も少なくありません。

それでも、待っているだけでは人材は集まりませんから、各園でさまざまな工夫をするとよいと思います。例えば、園のホームページなどで、「これから保育者をめざしたい人の相談に乗ります」と打ち出して人材を集め、手厚くサポートをしながらか育てていくという方法も考えられます。



子どもの姿を中心に置けば 経験にかかわらず対等に語り合える

保育者の定着も多くの園に共通する課題の1つです。保育者の退職理由としてもっとも多いのは、人間関係の悩みです。若い保育者は理想をもって入職しますが、「想像していた保育とは違う」など、現実の壁にぶつかることも多いものです。その際、周囲の先輩などに率直に悩みを話せる環境がないと、1人で悩みを抱え込んでしまいます。

保育者の成長を温かく支える環境をつくるためには、園長やサブリーダーのふるまい方が重要です。保育者の悩みに耳を傾け、「私も同じことに悩んだよ」などと共感し合える人間関係であれば、そこは居心地のよい職場になります。

そうした人間関係づくりでもっとも大切になるのは、ベテランや若手が年齢や経験に関係なく対等に語り合える場を設けることです。そこで、子どもの姿を自由に語り合うのです。1日5分でよいので、その日に「子どもから学んだこと」「面白いと感じた姿」など、肯定的な内容を1つずつ出し合って語り合う習慣をもちましょう。その中で、それぞれの保育者のよさが見えてきますし、若手の悩みに周囲がアドバイスをしたり、逆にベテランが新たな刺激を受けたりすることもあるでしょう。園内にそうした語り合いの文化ができると、人間関係がよくなって保育者の定着につながるとともに、子どもの見方が深まって、一人ひとりの保育者に成長をもたらすはずです。

また、コロナ禍においては、保育者も大きなストレスを感じています。「保護者とのコミュニケーション」でお話しした内容と同様、保育者一人ひとりの話をよく聴いて、精神的なサポートをすることも大切にしてください。

コロナ禍に おける保育

身体面では、子どもが自然に分散できるような環境づくりを工夫する。精神面では、距離が近づくよう、共感的なかわりを大切にする。

人との距離が離れる今だから 精神的な距離を近づける

新型コロナウイルスに対するさまざまな対策が、子どもの育ちにどう影響するかを心配する保育者は多いでしょう。例えば、保育者がマスクを着用すると、表情を通じたコミュニケーションが困難になったり、乳児が言葉を覚える過程で保育者の口の動きを模倣しづらかったりといった、さまざまな影響を懸念する声が聞かれます。そのため、場面に応じて保育者がマウスシールドを使用して、表情を見えやすくしている園もあります。

この問題が難しいのは、保育の現場では子どもとの深いかかわりが避けられないことが関係しています。今後の感染動向を注視していく必要はありますが、子どもの感染者の報告数は少なく、感染しても重症になりづらいといったデータもあります（2021年1月時点）。必要以上の接触には気をつけなければなりません。接触に過敏になるあまり、子どもに悪影響が生じないように配慮しましょう。例えば、子どもが泣きながら近づいて

きたら、コロナ禍の状況であっても、優しく抱っこをして話を聴いてあげるべきだと、私は考えています。

ただ、子どもが1か所に集中せず自然と分散するような環境づくりは心がけるとよいと思います。例えば、園庭のあちこちに、ドラム缶やタイヤ、ビールケースなど、子どもの興味を引きそうなさまざまな可動遊具を置いておくと、それぞれの場所で多様な遊びが発生します。屋内でも密集して一斉に活動するのではなく、興味をもとに形成された小グループで、多様な活動が展開される環境をつくりましょう。

コロナ禍では、いつも以上に子どもに対する精神的なケアにも力を入れてほしいと思います。世の中では、「ソーシャル・ディスタンス」として人同士の物理的距離を保とうとしています。しかし、子どもは大人にくっつくことで精神的な安心感を得るものです。物理的距離が生まれやすい今だからこそ、精神的な距離を近づけて、子どもに対する共感的なふるまいや言葉かけを意識していただきたいと思います。

保育者の方へのメッセージ

子どもたちは、新型コロナウイルスの問題に対応する大人の姿を目の当たりにしています。大人がネガティブな態度や発言を続けると、子どもたちは未来を暗いものと捉えて、前向きに生きていく夢が育まれにくくなるのではないかと心配しています。

たしかに新型コロナウイルスの収束は難しいですし、それ以外にも世界にはさまざまな問題が山積しています。だからといって悲観的な側面ばかりを伝えるのでは

なく、自分たちがやりたいことやできることを増やして、夢を実現する喜びを体験できるようにすることが大切だと考えています。料理ができるようになったり、植物を育てたり、そんな小さなことでよいのです。小さな成功体験を積み重ねることで、世界を少しずつ変えていける。子どもたちには、そうした感覚を育んでいただきたいと思います。その意味では、保育とは未来の人類や社会を育てる営みにほかなりません。保育者のみなさんもこの仕事に誇りと自信をもち、少しずつでも思いを形にしていけるように頑張ってくださいと思います。